【第７回】石狩市総合計画策定審議会開催結果報告書

平成 26 年 11 月 18 日

【日　時】　平成２６年１０月２９日（水）18：00 ～ 20：00

【場　所】　石狩市役所４階　401・402 会議室

【出席者】　２３名（３０名中）

役職	氏名	出欠	役職	氏名	出欠	役職	氏名	出欠
会長	蛯子　准吏	○	委員	川浪　香織	×	委員	椿　晃	○
副会長	酒井　志津子	○	委員	木脇　奈智子	×	委員	永井　利幸	○
委員	會木　秀俊	○	委員	佐々木　大介	○	委員	中村　武史	○
委員	阿部　佑紀	○	委員	笹原　實穂子	○	委員	二上　朋子	×
委員	石丸　千登勢	○	委員	佐藤　勝彦	○	委員	林　克弘	○
委員	岩山　直江	○	委員	佐藤　眞彰	○	委員	原　俊彦	○
委員	梅田　真史	○	委員	澤　伊三男	○	委員	藤田　宏司	○
委員	大津　幸司	○	委員	白井　かの子	○	委員	堀内　智睦	×
委員	大山　清愛	○	委員	髙梨　朝靖	×	委員	向井　邦弘	○
委員	加藤　博典	×	委員	竹口　尊	×	委員	若林　厚一郎	○

※正副会長を除き、五十音順

□事務局等　石狩市企画経済部

加藤部長、佐々木ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ担当課長、石澤企画担当主査、池内企画担当主査、青木企画担当主任

株式会社 KITABA

窪田ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾏﾈｰｼﾞｬｰ、内匠ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄﾏﾈｰｼﾞｬｰ、安達ﾌﾟﾗﾝﾅｰ、伊藤

【傍聴者】　０名

【次　第】

１．開会

２．第２回分科会の振り返り

３．第３回分科会の検討について

４．分科会

・議論

・発表

・まとめ

５．その他

６．閉会

＝＝＝＝＝＝ 審議内容の記録（審議経過、質疑・意見　等）　＝＝＝＝＝＝

※ 以下の質疑・意見については、○は委員発言要旨、●は事務局発言要旨。

１．開会

２．第２回分科会の振り返り　　※全体ファシリテーターより説明

※それぞれの分科会に分かれて、第２回分科会の振り返りを行う。

（分科会のテーマ：第１分科会「高齢者の活躍」、第２分科会「石狩の顔づくり」）

３．第３回分科会の検討について　　※全体ファシリテーターより説明

・第１回・第２回分科会での意見を踏まえ、各分科会のテーマの実践過程（サイクル）案について確認する。

・実践過程（サイクル）について、協働の取組みの追加のアイデア等を出し合い、各グループでアイデアシートの内容を具体的に検討して完成する。

４．分科会

＜発表＞　※各グループから発表

＜まとめ＞　※全体ファシリテーターより

- ３回の分科会を経て、活発な議論がなされたと思う。
- 各グループ共通して楽しそうに作業をしているという印象を受けた。まちづくりは行政から義務付けされて強制的に行うわけではく、市民が楽しくなければやる価値が無いものだと思っている。
- 今までは「公共」という言葉があり、「公共＝行政」というイメージが強く、15 年ほど前から、「経営」という言葉も一緒に付けるようになった。これは、財政状況が厳しくなってきたという面もあるが、「公共経営」とは何か？
- 今までは、「公共経営＝行政経営」と捉えられていることが多く、第４期総合計画までは、まさに「行政経営」だと思っている。今回、石狩市はこの考えを変えるということで、「市民と共につくる」計画づくりをしたいと委員の皆様にも説明してきたところである。
- 「地域経営」という言葉がある。「地域」と「公共」は非常に近接性の高い言葉だが、地域・公共とは、「画一的」ではなく「多様的」でなければならない。
- 委員の皆様に頂いた意見は、統一的なものに対し多様的な主体・アイデアであったと思う。
- ３回の分科会は、この「地域経営」を取り入れた市民参加の仕組みを計画策定時に行ったと

いう点で画期的なものだったと思う。

・　今までの市民参加は、行政で決めたことに対しての返事を市民にもらうという形だったが、今回は市民の意見を取りまとめ、事業レベルにまで反映したところが非常に良かったと思う。

・　「市民参加」は、今までは計画を策定する時のみ、若しくは出来た計画・事業に対する評価をする時にしか参加が出来なかった。これは双方に、「行政経営」という考えがあったからである。

・　今回は、これからの総合計画をより進化させて行くため、「地域経営」の担い手として、市民が主体となって参加して取り進めていくというものであり、来年以降、この総合計画を動かしていくためには、委員の皆様にも主体となってご参加いただきたいと思っている。

５．その他（事務連絡）

・第８回総合計画策定審議会について（12 月予定：総合計画の全体像の説明）

６．閉会

平成 26 年 11 月 18 日　議事録確定

石狩市総合計画策定審議会　会長　蛯子　准吏

【グループごとのまとめ】

＜第１分科会　１班　【テーマ】「高齢者の活躍」＞

□持続的なまちづくり組織をつくる

【まちづくり組織の主な事業内容】

・高齢者の就業の場（高齢者に限らず市内外の人の就業の場となることが理想）。

・いしかりプロモーション（あなたが主役キャンペーンなどの企画運営）。

・地域のエリアマネジメント。

・NPO や各種団体の組織化をサポート（まちづくり活動含む）。

・介護、健康、ケアサポートなど。

【まちづくり宣言】

・石狩市が“石狩まちづくり宣言”を行い、企業や団体、市民が署名して新組織の立ち上げをプロモーションするセレモニーをやってはどうか。

・石狩地域創生宣言をしてインパクトを残すことで、組織運営スタートを広く周知する。

【まちづくりを進めるコーディネーター】

・震災などがあったときのトラブルを解決していくには、全体運営を進めるコーディネーターが必要となる。

【立場を超えたメンバー】

・組織メンバーには、企業や市民、行政などいろいろな立場の人がいると良い。

・行政だけの集まりだと市民は参加しづらい（敷居が高そうな印象がある）。

・石狩市は、まちづくりに参加するための間口が広く、ハードルも低い印象があって、参加しやすい気風がある。

【いしかりエリアマネジメントを行う】

・「まちづくり公社」のような母体をつくって地域のまちづくりを担う仕組みがあった方が良い。

・常設の組織とし、人材も募集して「会社」として運営するようにした方が継続的にまちづくりをマネジメントできると思う。

・仕事のできるオフィスを設け、就労の場や機会をつくる。

・ドイツのフライブルグでは、食住付のエリアマネジメントを進めている事例がある。

・市民が活動しやすい土壌をつくるため、NPO 化や活動団体化に向けた組織づくりの支援を行う。

・まちづくり組織は、組織化サポートを行う親団体とする。

【組織の評価方法（投票方式の採用）】

・Facebook や Twitter などでまちづくり組織の取り組み内容を常に発信・更新し、市民の目にふれるようにする。

・取り組み内容については、「投票」を行う（総選挙のようなイメージ）。

・投票方式にすることで、市民にとってはまちづくりへの参加の機運が醸成される。組織としてはこれまでなかったような手法で取り組み成果を評価することができる。

【ソーシャルビジネス】

・ソーシャルビジネスを行っていくことも考えられる。

□あなたが主役キャンペーン

【スタートアップのプロモーション（ポスターのイメージ）】

・「PR 素材のポスター」はモデル（Mr.または Ms.イシカリ（新たに 65 才を迎える方））が石狩海岸をバックに立っているシーンがあると良い。

【 「新いしかり市民」の募集】

・「新いしかり市民」を募集しても良いのではないか。

・特に札幌市民を対象にしたキャンペーンにしたい。

・「石狩の好きなところ」おすすめスポットを募集して「石狩現代 100 話」を選ぶ。

【まちづくりコンテスト】

・「まちづくりコンテスト」を年代別（年少～大人）で開催して活動を具体化していく。

・コンテスト参加を有償ボランティア扱いとすることで、参加側の意識も高まる。

・市民が評価を行うことで、モチベーションが高まるのではないか。

・60～70 代の人が集まる会をつくって、活動内容を話し合ってもらう。

・まちづくりコンテストは、一時的なものではなく、継続することが大切であり、そのためには組織が必要である。

【組織化を目指す視点を持った募集対象】

・企業等に参加してもらうにはメリットが必要となる。

・組織化を見据えて企業や団体、キーになりそうな人に参加してもらう。

□いしかりポイントカード

・育児や託児に使えるなどインセンティブがあると使いやすいし、参加につながる。

・病院ボランティアやまちづくり活動を行うとポイントがもらえて、市内各所でサービスを受けることができれば良い。

・Sapica の制度と連携しても面白い。札幌市の協力も得られるのではないか。

・石狩版（まちづくり組織）のポイントカードとすることで、同組織が一括して運営していくことができる。

【カードは組織メンバーの証明（参加の敷居を低くする）】

・カードは組織が運営するため、配布されると組織メンバーとなる。

・出生や転入、または誕生日を迎えた人に、組織メンバーの証としてポイントカードを送る。

＜第 1 分科会　2 班　【テーマ】「高齢者の活躍」＞

■アイデアシート（高齢者の活躍②）「多世代が集う新たな受け皿」について検討。

□市民への参加の呼びかけ　「多世代へ向けた様々な周知」

・「石狩倶楽部（仮）」の設立。

・チラシやインターネット等の周知の手段は、世代によって効果的の得られ方が違う。

【チラシ・冊子への掲載】

・チラシを作成し、「石狩倶楽部（仮）」で様々な世代を対象とした倶楽部活動等を行うことを PR する。

・石狩市の広報誌にチラシを折り込む（1 度だけではなく、何度も繰り返すことで効果の拡大を図る）。

・チラシは、パソコンでつくったものだけではなく、手書きのものでも良い。

・お年寄りの集まりなどでチラシを配布すると効果的である。

・チラシは町内会でも回覧する。

・石狩市の仕事情報誌（フリーペーパー）の「スポット」に掲載してはどうか。

・毎年たくさんの人が訪れる石狩図書館の祭りで、チラシを配布して PR するのも良い。

【ポスター】

・生協やコンビニ、郵便局等に A 3 くらいのサイズのポスターをたくさん貼る。

【口コミ】

・母親の口コミは効果的である。

・母親の集まるところで PR すると、幼稚園や別の集まり等により口コミで広がる。

【ネット】

・若い人には SNS（ソーシャルネットワークサービス）等での情報発信が有効である。

・石狩市の事業やイベントなどを紹介している「えりすテレビ」があるが、もっと周知したほうが良いと思う。

【説明会を開く】

・まずは活動に興味のある前期高齢者はもちろん、多世代の市民を対象とした説明会を開いて、具体的な例をあげながら説明する。

・その際、高齢者の活躍のサイクル図を使って「石狩のまちづくり」のイメージを伝える。

・想定される活動リストの中から、やってみたい活動を選んでもらい、同じ活動を選んだ人同士でグループに分かれて活動のイメージを議論する。

・場所は市役所などで、子育て世代の方も参加しやすいように託児室などがあると良い。

・藤女子大学のボランティアサークルと連携した開催も考えられる。

【事務局】

・審議会委員の有志を中心メンバーにして、行政と協働で、「市民から市民への呼びかけ」を行う。

□活動する・個人が元気になる

・趣味や興味のあることを目的や目標をもって取り組むことによって、やりがいや参加のきっかけにつながる。

・楽しみだけではなく、収入があることで責任感ややりがいがうまれる。

・例えば、料理好きな女性が集まって石狩の特徴を活かした漬物などをつくり、藤女子大学の栄養科の学生とコラボしてつくり、全国へ売り出すなど。

□まちが元気になる

・そうした集まりが色々なところで活動すると、地産地消の石狩マルシェの開催に繋がっていく。

＜第２分科会　１班　【テーマ】「石狩の顔づくり」＞

□石狩市としての大きな方向性を示すことが重要

・大きな流れをつくることが大事。

・流れをつくれば市民はついてくる。

・大きな方向性をつくることがまずは大切。

□産業基盤・雇用が重要

・産業構造など基盤のことを考えることが大事。

・石狩に合う企業誘致が必要。

・石狩市として来て欲しい企業をしっかり示すことが大事。

・地域の特性にあった産業をつくっていく。

・雇用を生むように企業に来てもらうようにする。

・知的産業をつくっていく。

・人口が減っても雇用や収益のある豊かな暮らしをつくっていくことが大事。

□交通強化

・交通網も大事である。

□目玉になるもの

・大きな花火となるような目玉のものも必要。

・新港をエネルギー発電の基地にする。

・石狩南高校をもっと石狩に特化したものにしてはどうか。

・大学があったほうがよいと思うが、その際には交通も大事になる。

・大学などを地域産業と連携させる。

・石狩に交通の駅ができると人も企業も来ると思われる。

□魅力づくり

・地域に魅力がないと人は残らない。

・マーケットとしては海外を視野にいれるべき。

・売り出していく武器として外からお金をひっぱれるものはないか。

・例えば、高校の経営が難しくなっている中で、三笠高校では魅力作りをしている。

□石狩の魅力を売る

・外からお金をおとさせる。

・継続性がポイントである。

・滞在型農園（クラインガルテンなど）は道外から人が来ている。

・企業も雇用形態が変わってきている。

【厚田での取組み】

・厚田のハタハタのいずしは魅力として良いのではないか。

・希少価値を売りにしてはどうか。

・特産品をつくっていく。

・継続性を保つ。

・地元資本の企業がやることが大事（佐藤水産と連携する）。

・地元から起業して取組むことができないか。しかし、地域は閉鎖的である。

・地域の中からリーダーシップとしてひっぱっていく人が必要

【新しい農業・産業】

・新世代の農業をつくっていく（ネット販売）。

・発信型の産業をつくっていく。

・トレーサビリティにもなって、安全安心にもつながる。

■アイデアシート（石狩の顔づくり⑥）「交通アクセスネットワークづくり」について検討。

・石狩の中心「石狩駅」をつくり、交通強化

・札幌の新琴似の土地がポイントになる（調整区域）

・あいの里から環状でまわれるようにすると良いのでは

・災害があると緊急用として道路を整備することも大事

・高齢化が進むと車に乗る人が減るのでバスが重要になるが、現状は不便（特に冬）である

・石狩の境界から麻生まで専用の道路をつくりＢＲＴ（バス・ラピッド・トランジット）ができると、みんなの利便性を高めることができる

・石狩の交通について話しあう組織があるが今はあまり動いていないので、市が主導で議論していく

※ＢRT とは…【bus（バス） rapid（ラピッド） transit（トランジット）】

日本後に訳すと「バス高速輸送システム」。道路上に専用道路を設け、専用道路を走行するバスによって、鉄道並みの大量輸送を可能にするシステムのことを指す。

＜第２分科会　２班　【テーマ】「石狩の顔づくり」＞

■アイデアシート（石狩の顔づくり⑬）「コーディネーター育成」について検討。

コーディネーター育成 ← 核（コア）を動かす人材育成

□どんな人・組織にするのか

・食べていけるまちづくりコーディネートのプロを早くまちで育てる。
・地元の人材をまちづくりのプロに育てる。
・信念のある人・組織。
・若い人や学生達も参加するような、年々新陳代謝する組織。
・積極的な人の受け皿となるような組織。
・信頼度の高い人の受け皿となるような組織。
・各地域・エリアの人が入っている組織。
・農業や観光、商業などの全ての団体が入っている組織。

□方法

・地域おこし協力隊のような石狩の制度をつくる。
・まずは行動してみることも大事なので、何かプロジェクトを１つ動かしながら成功体験をして育てていく。
・若いうちに、成功体験をすると次々とアイデアを出すようになる。
・はじめの数年間は、まちづくりのプロである企業（まちづくり会社）を入れる。
・まちづくりの担い手は地元の子どもや高校生たちなので、学生も巻き込む。
・場所や建物などの「今あるもの」を活かしていく。
・例えば公園などの「今あるもの」をどう活かせるかという視点で進める。
・コーディネーターが行政などからお金をひっぱってこられるようになることが理想。

■サイクル図について

□三次元で成長していく

・２次元ではまとまっているが、上方向（３次元）への成長が見えると良い。
・１周したら成長しているはず。

□核（コア）づくり

・サイクルはどこが先ということではなく、コーディネートする核があれば、同時に進められる。
・まずは市民・企業・行政が一丸となって取り組むコアになる核をつくろう。
・何かやりたいことを相談できるノウハウを持っていて、コーディネートしてくれるような核に。
・人と人とをつなぐネットワークを持つ場所に。
・プロとして食べていけるまちづくりコーディネーターを育てる。

・市民を巻き込み、お金がかかる部分は行政や企業の協力を得る。
・観光就職支持セミナーや実務育成セミナーなどを活用する。
・ちいさいところからはじめても良い。
・発信するにも、発信基地が必要であるので、発信・発表のためのステージが必要である。
・人を育てることがコアとなり広がっていく。

□石狩学づくり

・観光パンフレットはたくさんあるが、活用されていない。
・観光パンフレットを置く場所に人がいないので、もっと身近な場所に置くべき。
・紙媒体での発信はやめて、まちかど情報員がカメラやビデオを使ってホームページや YouTube、テレビ番組などで配信すると良い。（※ホームページは更新しないとは意味がない）。

□その他

・小学生などからまちづくりの提案を受けても、その先につながっていない。
・もみじ山公園が使われていないのは何故か。
・琴似の地下のホールのようなものをつくると、若い人も来るようになりたくさん人が集まるのではないか。